

は三文に直段を定めと云り、これ其頃初茄子の價なり、五元集さみだれや酒匂でくさる初茄子、寶永ごろの吟なるべし、そのかみ駿河より五月出すを初茄子とす、今は年の寒暖に拘らず、三月に砂村より出るなり、初茄子の賞翫こゝのみにも非ず、東京夢華錄大内の條下に、其歲時果瓜蔬茄新上市、并茄瓠之類新出、每對可直三五十千、諸閣分爭以貴價取之、また秋茄子わさゝのかすにつけませてよめにはくれじ架におくとも、といへる古諺あり、望一後度千句のこれるもはや末なりの秋茄子にくまれにたる娶がしうとめ、大幣になれく、なすびせどのやのなすびならねばよめの名のたつに、洛陽集に、切形や青梅水に茄子浮元鹽鯨茄子の浪に寄にけり、友今まつもどきといふやうに切たるなるべし、松もどきとは、松茸に似せて切たるなり、又丸ながら豎にきりめを多く付る茶筌茄子と云ふ、所見なけれど、近頃の名には有べからず、又豎に二つにわりてきり目付たるは、蓮の花びらに似たり、これを蓮花茄子といへり、矢の根鍛冶後集和尙への馳走煮物もれんげ茄子、篋絨輪、伊勢講は料理にも忌蓮花茄子、といふ付句あり。

〔本朝無題詩七旅館附路次〕著葦屋津有感

同人○釋

沙月渚風秋皓々、自然遊子感吞胸、問津上下客、舟集分岸東南民、戶重夾岸有二庄一、土俗每朝先賣菜、黃瓜、紫茄、土人賣之故云。釣魚終夜幾燒松、漁舟篝火、終夜燒松也。不圖再到於斯地、思舊瀾干淚忽降、往年隨養親、路次泊、今又來故云。

〔翰林葫蘆集〕紫茄含露傍籬笆、再摘分來野老家、堪咲一僧夢求命、夜行踏殺作蝦蟆、題茄畫

〔鷲峯文集百五〕茄子高澤乞贊

誰家垣裏植箇茄子、維葉之青、其實之紫、既見於眼、蓋味于齒、孟乎莊乎、須辨彼此、

〔大和本草九雜草〕唐ガキ 又珊瑚茄ト云俗名ナリ、葉ハ艾葉ニ似テ大ナリ、又南天燭西瓜ノ葉ニ似

タリ、每葉小片兩々相對シテ大小相挾メリ、實ハホウヅキヨリ大ニシテ殼苞ナシ、熟スレバ赤シ、其サ子ハ龍葵ノ如シ、稻若水曰、天茄子ナリ、老鴉眼睛茄ヲモ天茄子ト云、ソレニハ非ズ、